

くれている。紹介した二つの例で、彼のインタビュの前に、人はいかに正直になるか、読みとることができるだろう。五〇〇ページを越す分冊、いろんな登場人物が出てくるし、場面転換がひんばんで

スラスラとは読めない。読み終えるのにかなり時間がかかったことを正直に告白せねばなるまい。
(評者は毎日新聞編集委員)
(晶文社 二二〇〇円)

中嶋 嶺雄著

『文明の再鑄造を目指す中国』

壮大なモデルの追究

評者 今堀 誠二

本書のタイトルは、次のような中国観をふまえての発想である。中国の最高指針であった「毛沢東モデル」は、すでに過去の歴史のひとコマとなったが、これに代わるモデルはまだできていない。一九七五年一月に周恩来が提示した「四つの現代化」路線は、七七年に党規約に明記され、七八年の三中全会で国家目標とされたが、それでモデルができたとは言えない。例えば六〇〇億米を要すると言われていた建設資金は、どうして集めるのか、現代化を阻む中国社会の古い体質や、一〇億の人口を養える耕地がな

きこと等、絶望的とらえてよほどの阻害要因が山積している。これらを克服しつつ、国家を建設するに足る、壮大なモデルの追究が、本書のねらいなのである。
I 「現代中国の政治と文明」では、毛沢東モデルに代わるものとして、ネットと非スターリン体制に焦点をあわせたい「ソ連モデル」、企業を労働者や農民の自主管理の下に置き、かつ資本主義的な市場経済を導入する「ユーゴモデル」、また「後進国モデル」等を取りあげた後、それらよりも、一九四九―五五年の中国新民主主義革命をふまえたモデル作りが、構想されるべきだとのべている。それは毛沢東モデルがスタートする直前の段階に当たるから、ここまでさかのぼって

農業集団化を再検討するとともに、中国の伝統社会、とくに土俗的・道教的な要素の復権を考えようというわけである。

中国の伝統社会の基本である共同体が、現在も生き続けていることは、張世俊「なぜ分隊現象が出現するのか」(一九七九年五月五日の『人民日報』)によって明らかである。この共同体が毛沢東モデルへの抵抗線になったわけであるが、新民主主義革命では、共同体を生かしながら社会主義に向かう総路線すなわち革命の具体策を示している。だからもう一度この原点にたちかえって、モデルを構築できないのではないかというのが、教授の問題提起である。

もっとも本書では新モデルの全容が語られていないわけではない。その代わり、世界各国の現代中国学の現状を紹介することによってモデル作りへのサジェッションを提供しようとするのである。

浅い日本の研究レベル

IIの「現代の中国と中国学」は、教授が自ら訪問して意見交換を行った中国、ソ連、西ドイツ、オーストラリア、アメリカ、フランス等の各国の、学問状況の報告である。例えば一九二〇年代の中共の最高指導者の一人、彭述之夫妻は中国革命の民主化に希望を託し、北京のディ

シデントグループの出している『北京之春』など、反体制派出版物を評価している。ソ連の学界は一九五〇年代の中ソ友誼時代をなつかしみつつ、ソ連モデルの復活はあり得ないという考え方である。アメリカでも中ソ和解は否定的に見られているが、中嶋教授は中国の世界戦略の基本は中ソ同盟にあるという立場をとり、これらの米ソの学者と、論戦を闘わしている。フランスでは、文革期には毛沢東礼讃が圧倒的であったが、今でもシエノーのように、四人組支持の立場を堅持している人もいる。しかし学界の大勢は、この間、終始毛沢東を批判し、中国の民主化を求める立場をとってきたギェルマズ、ベルジェール、ピアンコ等のリードするところとなっている。彼らは、天安門事件、魏京生事件など、ディシデントグループの動きを重視しているが、新しい中国モデルを発見するまでには到っていない。

IIIは「毛沢東主義をめぐって」と題され、日本の思想界が毛沢東にのめり込んでいた時期の全体像を明らかにしている。もっとも日本では、最初は毛沢東に對し、理解を示す人はごくまれであった。中共の勝利が確実になった時、アメリカ国務省は一九四九年八月に『中国白書』を発表しているが、日本では代表的ななかじま みねお 一九三六年長野県生まれ。東京大学大学院(国際関係論)修了。現在、東京外国語大学教授。